

複合語に關連して

堀井 令以 知

フランス語の合成語の中には、学者語起源の centimètre「センチメートル」、palmipède「游禽類」、télégraphe「電信機」のような語のほか、一般的合成語として種々のタイプが認められる。portefeuille「紙はさみ」、orfèvre「金銀細工師」、betterave「甜菜」、marchepied「階段」、averse「にわか雨」、entresol「中二階」などは、いずれも複合の要素を意識することが可能な合成語である。しかし、合成語の中には、現今では分析することが困難で、合成語の意識を失ってしまった語がある。aubépine「西洋さんざし」はaub(e)とépineの共時的分析がむずかしく、plafond(天井)もまたplatとfondの複合意識がうすれている。これらの合成語はcongloméréということもできる。

また、かつての述語的シンタグマが合成名詞になった次のようなばあいがある。va-nu-pieds「乞食」、meurt-de-faim「食うや食わずの人」、monte-en-l'air「押し込み強盗」、décrochez-moi-ça「古着屋」のように。次のような副詞的いまわしにも古風な要素が認められる。dorénavant「今後は」の中にはd'or en avantが含まれている。orは古代フランス語では「今」の意味であった。同じように、désormais「今後」はdès or maisから、auparavant「の前に」はau par avantのように分析することができる。aujourd'huiは現今でもその要素を十分に把握することができるし、古代の述語的シンタグマn'a guèreは、naguère「少し前」の中に集約されている。

上述の合成語はいずれも一つの造語素からなるが、次のようにdeまたはàで結ばれて三つの造語素から成る複合語がある。pomme de terre「馬鈴薯」、robe de chambre「部屋着」、clair de lune「月光」、plat à barbe「ひげに石鹸を塗るとき用いた皿」。このような複合語のタイプは、合成語と区別して結合語(synapsie)と呼ぶこともできる。

合成語と結合語はどのように区別されるであろうか。garde-malade「看病人」は合成語であり、gardien de phare「燈台守」は結合語である。また、gardien d'asile de nuit「共同宿泊所の番人」におけるasile de nuitは下位結合語(subsynapsie)といえよう。このばあいのdeは二重の機能を果していることになる。chemin de fer「鉄道」のような結合語は、固定性の強い結合語である。valet de chambre「給仕」は固定的であるのに、coin de chambre「部屋のすみ」は結合語というよりは連語であり、シンタグマのままである。

学者語の合成語の一つの特色として、フランス語においてastro-, géo-, cosmo-のように合成の前部分を-で終る語形に統一する傾向も注目してよい。また、結合語にあっては、結合素àやdeの機能が注目される。àによる結合語としては、次のようにàが目的を示すものがある。salle à manger「食堂」、fer à friser「ヘアアイロン」、machine à écrire「タイプライター」。区別の特徴を示すàの用法がある。oeil à facettes「昆虫の複眼」、serpent à sonnettes「がらがら蛇」。

àの先行する限定辞は次のように貶下的な構成にもあずかる。bouge à matelots ; fille à soldatsのように。必要なばあいにはàはpourに代替される：tailleur pour hommes ; compartiment pour dames。また、示されるものの性質がàの二つの用法を引出すこともある。moulin à caféは「コーヒ挽き」、moulin à ventは「水車」つまり「風によって動く」ものである。pompe à essence「石油ポンプ」のごときは、「石油で機能するポンプ」であると同じく、「石油を排出するポンプ」でもある。

結合素 de の用法をみると、限定辞が潜在的で被限定辞が限定辞の一部を示すばあいがある：peau de porc ; pied de table。さらに、メタフォールによって tête de loup, pied de biche, dent de lionのような結合語ができる。deはまた、対象もっている環境を示す：chemise de nuit, tenue de soirée, manteau de pluie, table de travail, salle de jeux, fusil de chasse。被限定辞が属性辞として働らく次のような結合語もある：robe d'avocat, béret de matelot, livrée de chauffeur, voiture d'enfant。(cf. E. Benveniste: Formes nouvelles de la composition nominale. BSL 61. p. 90~p. 95)

ラテン語の dominorum のような造語素においては、一つの造語素であられるが、実は -orum は二つの造語素の混合とみてよい。つまり、-orum は属格と複数とを示している。語彙的な言語ならば複合形式をとるようなばあいも、このような文法的言語では一つの造語素で示されていることになる。結合語を取扱うときに、Bloomfieldのいう free forms と bound forms の区別は重要である。(cf. Language, p. 160, 177~188) chemin de fer は bound form である。従って les chemins de fer algériens のような構成をとることができる。

複合語は、合成語にせよ派生語にせよ、一般に単語よりも形態論的に有縁である。(il) prend のような造語素に対して (il) entreprend のような構成を *synthème* といってもよい。chaise は単なる造語素であるが、chaise-longue は *synthème* である。しかし、la France d'il y a vingt ans の il y a vingt ans は *synthème* というよりは *syntagme* といった方がよい。ここで問題となるのは *synthème* と *syntagme* の区別であろう。avoir l'air のようないいまわしは *synthème* であるかどうか。avoir l'air とともに avoir un air が存在している。l' と un の代替可能な事実から avoir l'air は *synthème* よりも *syntagme* とみた方がよいかもしれない。しかし、最も日常的な使用として、この形は *synthème* と考えても差支えないだろう。一般に *synthème* は joint form であり、*syntagme* は free form ということができそうである。ラテン語の dominorum やフランス語の donnerons, sur la table は自由なモノーム (monème libre) であり、代替可能の自由形式である。これらにたいして indésirable, pomme de terre, chemin de fer などは結合度が強く monème conjoint である。また、monème と *synthème* と、この二つの術語が機能的に弁別されない環境では、単に thème の術語を用いてもよい。そして、au-dessous, au-delà とともに au dessous de, au delà de, au fur et à mesure のような構成も *synthème* として考えられよう。このように monème — *synthème* — *syntagme* の系列を考えるのは A. Martinet

の立場(Syntagme et synthème, La Linguistique, 1967/2)であるが、これとよく似た考えとしてA. J. GreimasはSémantique structurale, 1966. p. 27で, lexème — paralexème — syntagmeの区別を設けている。lexèmeはabricotのような語, pomme de terreはparalexèmeにあたり, pain de seigleはsyntagmeだという。

ロマン諸語を比較してみると、語形成の上で平行的事実と差異的事実とを見出すことができる。ラテン語からロマン語への経過の中で、かなり平行的発展を遂げたと考えられる数詞組織においても、言語間での構成法に若干の異同がみられる。数詞の1から10までについて、ロマン諸語は正確にラテン語の数詞に対応している。11から15までについては、ルーマニア語のほかはラテン語形に対応している。もっとも、語形は合成意識を失い、フランス語・スペイン語・ポルトガル語のように単なるモネームの意識しかないものもある。

	11	12	13	14	15
lat.	undecim	duodecim	tredecim	quattuordecim	quindecim
eng.	ūndē ^v	dugde ^v	trede ^v	katorde ^v	kinde ^v
it.	undici	dodici	tre dici	quattordici	quindici
es.	once	doce	trece	catorce	quince
po.	onze	doze	treze	quatorze	quinze
fr.	onze	douze	treize	quatorze	quinze

この表をみると、スイスのアンガディーヌ語やイタリア語は、フランス語などに比べて未だsynthèmeとして合成要素の分析が可能なのがわかる。ルーマニア語はラテン語の数詞体系にたいして、セルビア語・アルバニア語的構成に代替してしまった。つまり11は1プラス10のようにspreを挿入する。un-spre-zece(11), do^v-spre-zece(12), tre^v-spre-zece(13), patru-spre-zece(14), cinc^v-spre-zece(15)のように。spreによって、ルーマニア語におけるこれらの数詞の熟合度は弱いものとなったと思われる。16や17の数詞については、ロマン諸語は一般に11~15の数詞に比べて複合の意識は強く感ぜられる。ラテン語のsedecimにたいして、フランス語はseizeのように単語の感じをもつが、ルーマニア語のșasesprezeceやスペイン語のdiez y seisには加算の意識が強く、ポルトガル語もdezaseisのようにsynthèmeのタイプに近づく。17になると、septendecimにたいして、フランス語もdix-septの構成をとるようになり、ルーマニア語șapte-spre-zece, アンガディーヌ語di^vșset, イタリア語diciasette, スペイン語diez y siete, ポルトガル語dezaseteのようにsynthèmeの構成となる。ルーマニア語の20のごときは2・10(do^v zec^v)と分析することができる。イタリア語やポルトガル語の数詞17が十位と一位の数のあいだに挿入する母音aはadに由来するものではなくetからと考えられる。60を示すイタリア語のsessanta, ポルトガル語のsessentaは、ラテン語形の「母音プラスxプラス母音」にたいしてsを伴うようになっている。この形には一位の数6(sei, seis)の影響が認められる。ノルマンディ方言のsezãtもこの種のものであろう。90はフランス語を除いて、ラテン語のnonagintaに対応する。これはnovemを語基とする形で、古代フランス語nonante, プロヴァンス語nonanta, ヴェネチア

方言 *nonante*, アンガデーヌ語 *nunainta* のように複合してあらわれる。n-n-n から n-r-n への異化によって、いっそう熟合度を増しているものにカタロニア語やサルジニア語の *noranta* がある。フランス語の二十進法は語構成上注目される。二十進法は東部フランス方言, 南部フランス方言, プロヴァンス語には認められない。ところが, 古代フランス語には *dix-huit vingts* のような構成があり, 現今でも *l'hôpital des quinze vingts* (ルイ九世がバ리에建てた盲人300人を収容する病院) がある。イタリア語には正確な二十進法の資料がない。しかし, シチリア方言には二十進法の広まりがみられる。古代スペイン語の *tres vent* はおそらくガリシムであろう。

現在では *synthème* として働いている語が, かつては *syntagme* として機能していたこともあるわけで, これは次のように古代フランス語と現代フランス語を比べてみれば明らかである。aujourd'hui のような語は, 古代フランス語では未だ熟合しきっていない。synapsie の段階である。La Queste del Saint Graal の中には *au jor d'ui* の形がみえる。emporter や enfuir のような *synthème* の動詞も, XIII 世紀ごろはまだ合成度は弱く, 分離した形でもあらわれていた。Villehardouin の言語には次のような諸例がある。(cf. Wailly 編の Villehardouin: L'Histoire de l'empire de Constantinople.) [数字は各節を示す] *s'il vos en vueient maner* (60), *ce que il en porent mener* (109), *ce que il en pot porter* (182), *et en fu portez en litiere* (396), *après lui s'enfui qui fuir en pot* (246), *s'en ere fuiz* (182), *s'en fust fuiz* (248), その他。bienvenu は分離して "et l'empereres respondi que bien fust il venuz" (270) のようであった。

XIII 世紀ごろまでは, 小辞と動詞の結合も自由であり, *par* と *être* が複合して強調の役割を果たし, *mult parere de grant cuer* (67) のように用いた。また, 動詞前綴の *re-* は容易に動詞に着脱したため, *ot rassemblées ses gens* といっても *rot rassemblées ses gens* (451) といってもよかった。

さらに, 現在では *synapsie* としても *synthème* としても機能しないのに, 古代にあっては複合度が強かった構成がある。二つの名詞を結合するとき, 現在ならば A et B のように *et* を用いるのが普通であるが, 古代フランス語には *entre A et B* のような構成があって結合語の働かしを示していた。Chanson de Roland には次のように用いられている: *Entre Rembalt et Hamon de Galice / Les guideront tot par chevalerie*, (3073~4)。この使用はまた, 代名詞の結合にも広がっている: *Entre lui et Robert Cosel (Jeu de la Feuillée. v.213)*。このばあい, 「彼とロベールコゼルの二人とも」の意味である。F. Godefroy の辞典は多くの類似例を挙げているが, 人称代名詞の例は少ない: *Alons à lui parler, sire, entre vous et moi* (Berthe CV)。entre の意味は ≪y compris, tout ensemble, à la fois≫ へと移行するが, フランス語の *Entre canards et poulet, j'avais une trentaine de volailles*。のような用例と平行して, スペイン語の *Veinte personas, entre mujeres y niños, han perecido*。イタリア語の *Morirono più di mille settecento, tra cavalieri e pedoni*。のような用法がある。

派生語にかんしてロマン諸語は平行的な語構成をとることが多い。すべてのロマン諸語は,

かなり自由に動詞語基から行為者名詞を派生するために -tor のロマン語形を使用している。(Meyer-Lübke, Gr. rom., 2. p. 579) -tor による派生語はまた道具名詞としても用いられる。この方法の最も進んでいるのは近代フランス語である。フランス語ではほとんどつねに新しい発案の道具名詞に -teur, -eur をつけている: たとえば, numéro-teur, décortiqueur, embatteur, condenseur, pétrisseur, épurateur, extincteur。女性形 -euse の道具名詞としては, balayeuse, batteuse, faucheuse, moissonneuse がある。イタリア語においても、この種の道具名詞は少なくない。il motore, l'aspiratore, il calcatore, l'interruttore, l'acceleratore, l'ascensore, il contatore, il locomotore, il vaporizzatore, la locomotrice, la perforatrice, la motoaratrice のような新語も含まれている。道具名詞の接尾辞としては、なおフランス語の -ail, イタリア語の -aglio, -iglio などがある。イタリア語 battaglia, spiraglio, ventaglio, fermaglio, sonaglio, pendaglio, nascondiglio やフランス語の éventail, soupirail などの構成にそれが認められる。フランス語 -oir, イタリア語 -oio もまた道具名詞の構成にあずかる: rasoir, peignoir, couloir, boudoir; serbatoio, spengnitoio, rasoio, scannatoio, corridoio, spogliatoio など。これらは新しい器具を示すために、活動している生きた機械を思い浮べることのできる語構成といえよう。フランス語の écumeresse, イタリア語の frullone, frullino, scaldino などともそうである。

派生語は *synthème* のタイプにちがいないが、接尾形式の統一性が形態論の有縁性を強めることになる。E. Benveniste: *Noms d'agent et noms d'action en Indo-Européen*. p. 60 によれば、フランス語の行為者名詞構成の -(t)eur は二つの類に分けて考えることができる。その一は、限定を伴なって分詞の価値をもつ名詞である: *le libérateur du territoire, l'inventeur des phonographe, le fondateur de Rome, le vainqueur de Troie* のように。これらは完成した人を形容する、本人を示す名詞である。この類はまた、瞬間的活動に関係のある、現実的な活動にかんする名詞を含んでいる: *un promeneur, un consommateur, un spectateur* のように。これらの第一類にたいして、-(t)eur は次のように第二類の名詞を形成する。この類は非常に豊富であり増加していく。それが実行されなくても、そのもつ機能によって行為者を示す名詞である。たとえば, *électeur* は選挙する資格に関係がある。どのような選挙に参加しなくても *électeur* にちがいない。すこしも *inspecter* しなくても *inspecteur* でありうる。失職していても *tailleur* である。同様に、道具名詞としての *aspirateur* 「排気機」は一度も使用されなくてもその名で呼ばれるのである。行為者名詞としては、一つの型にはまり、機能するように定められていけばよい。近代フランス語におけるこの2類のあいだの相違は印欧語における区別を再現しているものようである。これらの -(t)eur の語が人間をさすか道具をさすかはそれほど重要ではない。そこにはパロールの問題があり、地方的で予知し難いものがある。同じ接尾辞 -eur にたいしてその意味を知らないならば, *chauffeur* 「火夫」が人間に適用され, *brûleur* 「ガス燈口」が道具だということを予知しえないだろう。また、技術の改新の必要からますます機械化する文明において、人間の努力が道具の機能に同化すること

とも避けたい傾向である。

意味論の見地からすれば、行為者名詞の次のような二つのカテゴリのあいだの区別が注目される。同じ語形に二つのことなる意味の使用が認められることもある：vendeur は「売る行為においての売手」を示すが、「店の売手」をも意味している；auditeurには「表現の聞き手」の意味と「参事院の陪席者」の意味とがある；書物のlecteurにたいして大学のlecteur「講師」がある。このような差異の感情は区別的な形態を使用させることにもなる。-eurと-ateurの対立が認められる：donneurにたいしてdonateur「贈与者」があり，donneur de sang「供血者」では職業的性格の語donneurがある；sauveurは救われたためにそうであるが，sauveteur「救助者」は職業名となる；dégusteurは味をみる人であるが，dégustateur de vinsでは「酒の味の鑑定人」である。一般的にみて，-eurにたいして-ateurは職業的であり，固定的意味をになっている。

Charles Bally (Linguistique générale et linguistique française, p. 245)によると、行為者名詞をつくる接尾辞について、ドイツ語の-erはフランス語の-eurよりも形態論的有縁性が強く、フランス語の次の16の種々な語形による行為者名詞のうち、ドイツ語では-erによる構成を探ることができる語は11もあるという。Ballyのあげる16のフランス語は、ferblantier, commerçant, fabricant, forgeron, charron, peintre, tisserand, apprenti, locataire, héritier, écrivain, juge, critique, poète, assassin, traîtreである。

接尾辞-torはすでに古典ラテン語に広まっていて、話しことばにおいても多くの動詞に付くことができた。古代フランス語では、cas sujetとcas régimeにおいて形態論的にことなる接尾形式を生じた。W. D. Elcock: The Romance Languages, 1960. p. 65によると、次のようにラテン語の主格形と対格形が古代フランス語にあらわれる。

cas sujet		cas régime	
imperator	> empere(d)re	impatorem	> empere(d)or
piscator	> peschiere	piscatorem	> pescheor
traditor	> traître	traditorem	> traitor
antecessor	> ancestre	antecessorem	> ancessor
pastor	> pastre	pastorem	> pastor

古代プロヴァンス語では、さらに明瞭にあらわれる。

nom. imperator	> emperaire	acc. impatorem	> emperador
amator	> amaire	amatorem	> amador
servitor	> servire	servitore(m)	> servidor
ingannator	> enganaire	ingannatore(m)	> enganador
tondetor	> tondeire	tondetore(m)	> tondedor

この二つのロマンス語は接尾辞-atorの使用により、アクセントと屈折の法則に従って、

古代フランス語 *peschiere(s)*, *pescheor*, 古代プロヴァンス語 *pescaire(s)*, *pescador* のように単数で2形に区別せられたのである。行為者名詞女性形は古代プロヴァンス語の *cantairitz*, 古代フランス語 *chanteresse* のような語形となる。現代の南仏では *-aire* の形は一般に偶然的な行為を, *-adou* は習慣的な行為, 職業を示すことになる。現代フランス語では, かつての *-eresse* はとくにXV世紀以来 *-euse* (= *ōsa*) に代替され, *trompeur* の女性形は *trompeuse* となった。なお, Ronsard の時代には *tromperesse* であった。*-eur* とともに *-ateur* の形も好まれ, *organisateur*, *-atrice* の構成も多くなっていくのである。イタリア語やスペイン語には *-atore* と並んで *-itore* もみられる。イタリア語 *parlatore*, *facitore*, *vincitore*; スペイン語 *hablador*, *vencedor* のように。フランス語には *-tore* からの語構成はみられない。ルーマニア語では, *-tore* と *-toriu* のあいだに混同があった。現代ルーマニア語は *-toriu* の形のみを残したのである。*vîntător* 「獵師」のごときは, 複数 *vîntătorî* (= *venatorii*) からつくられたものである。*pitar* 「パン製造人」, *străjar* 「番人」のような形は *-ariu* の接尾形式に由来するし, 語幹は外来形である。ラテン語の語幹にたいしてスラヴ型の接尾辞による行為者名詞がある。*casnic* 「召使」, *prădalnic* 「喧嘩好きの人」, *cîntăreț* 「歌手」。マジャーール語の *biráç* 「監督」の接尾辞は *mîncău* 「大食漢」の中に見出され, チュルク語の *sofragiü* 「従僕」の接尾辞はルーマニア語の *laptagiü* 「牛乳屋」に適用されている。ギリシャ語における *-τωρ*, *-τηρ* の2類の区別は, ラテン語で *-tor* 一形になるが, Plautus 時代から Cicero や Caesar の時代へとその使用の割合は2.8倍にも増加していった。ロマン諸語では *-tor* の継承形が用いられているが, 複合度はなお根強いものがあると思われる。

複合語が連語や文節にたいする関係は, 意味論的に多くの問題を提起する。連語について国語学辞典は次のような定義を示している: 連語は, 「二つ以上の単語が連結して, 単語よりも複雑な一まとまりの観念を表わし, しかも, まだ文をなすに至らないもの」である。日本語の「庭の」「庭の梅」「庭の梅が」「咲いた」「咲いたかしら」「きれいに咲く」「みごとに咲いたろう」などはいずれも連語だとしている。一方, 文節について, 国語学辞典は橋本進吉の「文節は文を実際の言語として, できるだけ多く句切った最も短い一句切である」のような定義を挙げている。このような定義からすれば, 文節は文にたいする分析的概念であり, 連語は形態素の連結的概念であると考えられる。連語と文節は結果的には同じばあいもあるが, 「きれいに咲く」は連語としては一つだが, 文節としては「きれいに」と「咲く」の二文節に分けられる。文節にたいしては *groupe rythmique* や *mot phonétique* の概念に近いように思われるが, 連語については *syntagme* があたるかと思われる。アクセントと文節の関係なども注意すべきで, M. Grammont の *Traité pratique de prononciation française*, p. 121~p. 125 などの説なども参考になろう。フランス語で, *il parlait bien* のように *bien* にアクセントをおけば一つの単純な考え, 「彼がうまく話していた」ことを示して1文節とみるが, *il parlait bien* のようにアクセントをおけば2文節になるという。このばあい, 「彼が話す行為をしていて, そしてそれをうまくやった」の意味で, 第二の考えが第一の考えを限定して二つのことなる考えを示しているから2文節だとみるのである。このように文節を分つ規準はきわめてデリケートであることが分る。なお, これらの問題については, 拙稿「単語・連語の構成論の方法」(口語文法講座I, 明治書院)を参照せられたい。(27. V. 1968)